

民法読解 親族編

大村敦志

2015年12月発売／590頁／本体7000円＋税
A5判／上製



編集
担当者
から

民法の条文には、そんなに長い条文はありません。比較的シンプルに出来ていると言ってよいと思います。けれども、ここに辿り着くまでに、どれだけの議論がなされたのでしょうか。民法の親族編には、明治維新と第二次大戦後に大きな転換がありました。時代の動きの中で立法者たちはどれだけのことを考えたのか。私たちが普通だとか新しいと思っていることでも、彼らが考えに考え抜き、先の先を見通した結果なのかもしれません。例えば夫婦別姓など、最近のテーマのように見えることも、実は明治民法の立法当初に検討されていたのです。

本書は現行民法の条文を入り口として、その立法当時、また旧民法や明治民法の時代の議論を丁寧に読み深めます。そしてそこから、新しい民法、新しい家族のすがたを追いかけます。かつての議論から発見できることがこんなにあるのか、立法者はここまで見据えるものなのか！読み進めると驚きの連続で、読みふけてしまう一冊です。(YF)

Index



現行民法の条文を順に読み解き、家族と民法の変遷を辿る。

序言

前編 家族の現在 ——子どもを育てる家族

第1部 大きな家族・小さな家族

- 第1章 総則
- 第2章 婚姻

第2部 親子関係の成立をめぐる諸問題

- 第3章 親子

第3部 子どもの福祉と親の権限

- 第4章 親権

中編 家族の過去 ——家とは何であったのか

- 旧第2章 戸主及ヒ家族
- 結語1 「家族」から「個人」へ

後編 家族の未来 ——個人を支える家族へ

- 第5章 後見
- 第6章 保佐及び補助
- 第7章 扶養
- 結語2 財産の法から人格の法へ？

あとがき